

第23回 手話言語研究セミナー

ろう教育研究部

## 教員の手話に関する検討

～子どもの発達段階に応じた豊かなコミュニケーションのために～

発表者：井口 亜希子（茨城大学 教育学野），天野 貴博（葛飾ろう学校）

### 2024年度 ろう教育研究部の活動




#### 【協議内容】

#### □ ろう/難聴児にとっての豊かなコミュニケーションとは？

子どもたちの成長において「わかった」「伝わった」が実感できるコミュニケーションの積み重ねが重要

#### □ 子どもたちとかかわる教員に求められる「手話」や「コミュニケーション」の力とは？

▶子どもの各発達段階におけるポイントについて、教育実践や先行研究を踏まえて検討


| 発達段階   | 主担当（担当者の専門領域）                            |
|--|--|
|  乳幼児期       | 井口（就学前 乳幼児）                              |
|  学童期        | 三井（小学部 児童）<br>大鹿<br>（多様な背景をもつ<br>幼児児童生徒） |
|  思春期<br>青年期 | 天野（中・高等部 生徒）                             |

2024年度研究員：◎大鹿 綾（大学），井口 亜希子（大学），天野 貴博（ろう学校教員），三井 博昭（ろう学校教員）

# ろう／難聴児のコミュニケーション環境をめぐる社会的課題

- ・先天性難聴は0歳代で発見される（2022年度出生児の新生児聴覚検査受検95.2%） [こども家庭課庁, 2024]
- ・ろう／難聴児の家族の約9割はきこえる人

ろう／難聴児      きこえる親



…発達の基盤となる親子コミュニケーションを形成できるか？  
…手話コミュニケーションのロールモデルの不足

→ろう学校の重要性！

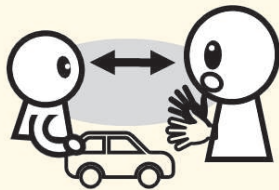
- ・2022年 厚生労働省「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針」  
ろう学校の乳幼児教育相談における支援の充実&地域格差解消  
関係機関と連携して人的・物理的環境を整備していく必要

厚生労働省 令和4年2月25日 [難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp)

## ろう／難聴児のコミュニケーションの特徴

〔発達心理学分野〕 視野・視線の分析からみる養育者と乳児のコミュニケーション行動に関する研究より

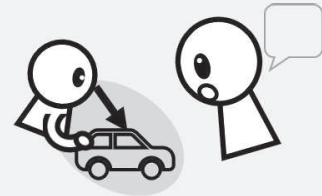
### ろう／難聴児



モノを見る／話し手を見る を交互に行う  
視線を合わせてから、話をきく・会話をする

(Brooks et al., 2020)

### 聴児



モノを見ながら話をきく  
視線を合わせずとも音声で会話する

(Yu & Smith, 2012)

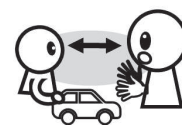
### 「視線」のやり取りから、コミュニケーションが始まる

- ・子ども：大人の視線の先を追うことで、さまざまな情報を得ている  
大人の方を見るとおもしろい、楽しい！ →よく大人を見るようになる
- ・大人：子どもの視線の先を追うことで、子どもが何をみているか？興味関心を知る  
子どもがモノを観察しているときは待つ。子どもと目が合ったら、すかさず反応！  
→目と目が合うことが会話の始まりの合図に

- ・乳幼児期の子ども、  
特にろう／難聴児にとって重要
- ・視覚言語である手話コミュニケーションの基本となる

## 教員に求められる手話／コミュニケーションのスキル

教員には、手話や日本語などの基本的な言語能力だけでなく、ろう／難聴児の感覚情報入力の特徴（視線の使い方など）、視覚的な情報の提示方法、“今”目の前の子どもに必要な言葉かけなどのコミュニケーションスキルが求められる

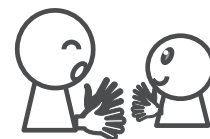


### 乳幼児期の発達段階を例にとると…

- 乳幼児期の子どもは、ことばを使い始める前から、豊かなコミュニケーションをしている  
例) 視線、身振り、声（笑い声、泣き声、叫び声など）などの非言語行動によって発信
- 大人が子どもの表出を敏感に捉えて反応することで、コミュニケーションが促進される  
例) 大人が子どもの「手指の動き」に敏感に反応 →子どもは「手指」により自分の要求や思いを伝達できるとに気づく
- 教員と子どものコミュニケーションの原則（Inter REActive Language and communicationより）
  - 子どもの発達レベルに合わせる。
  - 会話や遊びの主導権を子どもに持たせる。
  - 子どもから始められるよう待ち時間を取る。子どものリズムに合わせる。
  - 会話や遊びを共有し、コミュニケーションを楽しむ。

## ろう学校の役割

- ① 幼少期から、小学部、中学部、高等学部すべての段階において  
“人と人が伝え合うコミュニケーション”を大切にし、  
手話などの視覚的な情報による「わかる」経験を積み上げていく



→教員には、子どもの発達段階を踏まえたコミュニケーションスキルが求められる

- ② 手話コミュニケーション環境の中で、集団での対話を通して学び合う

- 課題：ろう学校に在籍する子どもの減少，ろう者教員の不在（成人ろう者と出会う機会）
- 近年の取り組み：全国各地のろう児／難聴児が繋がるICTやオンラインの活用

学校以外のNPOや地域のろう者との連携（多様なろう者，手話との出会い）



## 教員の手話／コミュニケーションスキルの向上のために

多くのろう学校で「手話研修」が実施されているが…

### 【教員対象の手話研修の課題】（坂井，2018）

- ・ 研修時間の確保（教員の業務量，特別支援教育に関わる幅広い専門性の確保）
- ・ 教員間における手話のスキルの差
- ・ 各教員に合わせた指導人材の確保，指導内容の検討

### →教員の手話／コミュニケーションスキルの向上のために検討が必要な事項

研修内容：子どもの発達段階，多様な実態を考慮した手話コミュニケーション

実施方法：ICTやオンラインの活用による複数学校合同研修（指導人材確保の地域差解消）

各地域のろう者，手話通訳者との連携

【引用】坂井肇（2018）公立聴覚特別支援学校における教員対象の手話研修の実態と課題.日本手話研究所第17回手話研修セミナー記録集. p3-14.

ろう教育研究部メンバーより

## さいごに

- ・ ろう学校では・・・  
幼少期の親子コミュニケーションや，学校での教師や仲間とのコミュニケーションなど，豊かなコミュニケーション環境の中で，ろう／難聴児の生きる力となる  
「伝わった！わかった！の喜び」「伝えたい！知りたい！の意欲」を育てていく
- ・ ただし・・・  
ろう学校の中だけでは，豊かな手話コミュニケーションを育てていくことに限界がある  
今，ろう学校が，地域とつながることが求められている  
（ICTの活用による地域格差も期待される）

是非，みなさんのアイディア、力をお貸してください！